TADOKU JUNIOR　やさしい名作リーダー　★★★☆☆ ふつう　800語

The Apples of Idun

イズンのリンゴ

E. Louise Smythe（1904年の本）　**原文そのまま**　朗読：Sarah Jennings、Abby

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　北の国の神さまたちが、わかさをたもつために食べる金のリンゴ。いたずら者のロキが、ワシに化けたきょ人につかまって、とんでもないやくそくをしてしまいます……。

Once upon a time three of the gods went on a journey.

One was Thor and one was Loki. Loki was ugly and mean.

The gods liked to walk over the hills and rocks. They could go very fast for they were so big.

The gods walked on and on.

At last they got very hungry. Then they came to a field with cattle.



Thor killed a big ox and put the pieces into a pot.

They made a big fire but the meat would not cook. They made the fire bigger and bigger, but the meat would not cook.

Then the gods were very cross.

Some one said, "Give me my share, and I will make the meat cook."

The gods looked to see who was talking. There in an oak tree was a big eagle.



The gods were so hungry that they said, "Well, we will."

The supper was ready in a minute.

Then the eagle flew down to get his share. He took the four legs and there was not much left but the ribs.

This made Loki cross for he was very hungry. He took a long pole to hit the eagle. But the pole stuck to the eagle's claws. The other end stuck to Loki.

Then the eagle flew away. He did not fly high. He flew just high enough for Loki to hit against the stones.

Loki said, "Please let me go! Oh, please let me go!"

But the eagle said, "No, you tried to kill me. I will not let you go."

And the eagle hit him against the stones.

Loki said again, "Please let me go!"

But the eagle said, "No, I have you now."

Then Loki knew the eagle was a giant and not a bird.

This giant had a suit of eagle's feathers. He was flying in his eagle suit when he saw Loki.

Now the gods lived in a city named Asgard.

In this city Idun kept the beautiful golden apples. When the gods felt they were growing old, they ate the apples and were young again.

The giant wanted to be like the gods. So he said to Loki, "I will let you go, if you will get me the apples of Idun."



But Loki said, "I can't do that."

So the eagle bumped him on the stones again.

Then Loki said, "I can't stand this. I will get the apples for you."

Loki and the eagle went to the city. The eagle stayed by the gate, but Loki went into the city. He went up to Idun. She was putting the apples into a beautiful golden box.



Loki said, "Good morning, Idun Those are beautiful apples."

And Idun said, "Yes, they are beautiful." "I saw some just like them, the other day," said Loki.

Idun knew there were no other apples like these, and she said, "That is strange. I would like to see them."

Loki said, "Come with me and I will show them to you. It is only a little way. Bring your apples with you."

As soon as Idun was out of the gates the eagle flew down. He picked her up in his claws. Then he flew away with her to his home.

Day after day passed and Idun did not come back. The gods did not have the golden apples to eat, so they began to get old.

At last they said, "Who let the apples go?"

Then Loki looked pale and the gods said, "Loki, you did it." And Loki said, "Yes, I did."



He did not tell a story that time.

Then Loki said, "I will get Idun and the apples back, if I may have the falcon suit."

The gods said, "You may have it, if you will bring the apples back."

Loki put on the falcon suit and flew away. He looked like a big bird flying.

When Loki came to the giant's home, he was glad the giant was not there. He changed Idun into a nut and then flew away with the nut.



When the giant came home, Idun was gone. The golden apples were gone, too.

Then the giant put on his eagle suit and flew after Loki.

Loki heard the eagle coming. Loki flew faster.

Poor Loki was all out of breath. The eagle flew faster and faster.

Then the gods got on the walls to look for Loki. They saw him coming and the eagle after him.

So they made fires on the walls. At last Loki flew over the walls.

Then the gods lighted the fires. The fires blazed up.

The eagle flew into the fire and was burned.

As soon as Loki put the nut down, it changed to Idun.

The gods ate the beautiful golden apples and were young again.



むかしむかし、三人の神さまが旅に出かけました。

ひとりはトールで、ひとりはロキでした。ロキはみにくくて、いじわるでした。

神さまたちは、おかや岩の上を歩くのが好きでした。神さまたちはとても大きかったので、とても速く進むことができました。

神さまたちは、どんどん歩いていきました。

とうとう、とてもおなかがすいてきました。そのとき、牛のいる野原にやってきました。

トールは大きな牛を一頭たおして、肉をなべに入れました。

大きな火をたきましたが、肉はちっともにえませんでした。火をどんどん大きくしましたが、それでも肉はにえませんでした。

神さまたちは、すっかりきげんが悪くなりました。

だれかが言いました。「わたしにも分け前をくれたら、肉をにえるようにしてあげよう。」

神さまたちは、だれが話しているのかと見まわしました。すると、カシの木に大きなワシがいました。

神さまたちはとてもおなかがすいていたので、「よし、わかった。」と言いました。

夕ごはんは、あっというまにできあがりました。

すると、ワシが自分の分け前をとりに飛んできました。ワシが四本の足をとっていったので、あとにはあばらほねのほかには、あまりのこりませんでした。

ロキはとてもおなかがすいていたので、はらを立てました。ロキは長いぼうを取って、ワシをたたこうとしました。ところが、ぼうはワシのつめにくっついてしまいました。ぼうのもう一方のはしは、ロキにくっついてしまいました。

そしてワシは飛び去りました。ワシは高くは飛びませんでした。ちょうどロキが石にぶつかるくらいの高さを飛んだのです。

ロキは言いました。「どうか、はなしてくれ！ああ、どうか、はなしてくれ！」

けれどもワシは言いました。「いやだ。おまえはわたしをころそうとした。はなしてなどやるものか。」

そしてワシは、ロキを石にぶつけました。

ロキはまた言いました。「どうか、はなしてくれ！」

けれどもワシは言いました。「いやだ。もうつかまえたぞ。」

そのときロキは、このワシは鳥ではなく、きょ人だと気がつきました。

このきょ人は、ワシの羽でできた服を持っていたのです。きょ人は、ワシの服を着て飛んでいたときに、ロキを見つけたのでした。

さて、神さまたちは、アスガルドという町に住んでいました。

この町で、イズンという女神が、美しい金のリンゴを守っていました。神さまたちは、自分が年をとってきたと感じると、そのリンゴを食べて、またわかがえるのでした。

きょ人は、神さまたちのようになりたいと思っていました。そこで、きょ人はロキに言いました。「イズンのリンゴを持ってきてくれたら、はなしてやろう。」

けれどもロキは言いました。「そんなことはできない。」

そこでワシは、またロキを石にぶつけました。

するとロキは言いました。「もうがまんできない。リンゴを持ってきてやるよ。」

ロキとワシは、町へ行きました。ワシは門のそばでまっていて、ロキが町に入っていきました。ロキはイズンのところへ行きました。イズンは、リンゴを美しい金の箱に入れているところでした。

ロキは言いました。「おはよう、イズン。きれいなリンゴだね。」

するとイズンは言いました。「ええ、きれいでしょう。」「このあいだ、これとそっくりなリンゴを見たよ。」とロキは言いました。

イズンは、このほかにこんなリンゴはないと知っていたので、言いました。「それはふしぎね。見てみたいわ。」

ロキは言いました。「いっしょにおいで。見せてあげるよ。ほんのすぐそこさ。きみのリンゴも持っておいで。」

イズンが門から出たとたん、ワシが飛びおりてきました。ワシはつめでイズンをつかみ上げました。そして、イズンをつれて、自分の家へ飛んでいってしまいました。

何日も何日もすぎましたが、イズンはもどってきませんでした。神さまたちは金のリンゴが食べられないので、年をとりはじめました。

とうとう神さまたちは言いました。「リンゴを持ち出させたのはだれだ？」

するとロキの顔が青くなったので、神さまたちは言いました。「ロキ、おまえのしわざだな。」ロキは言いました。「ああ、そうだよ。」

そのときは、ロキはうそをつきませんでした。

そしてロキは言いました。「ハヤブサの服をかしてくれたら、イズンとリンゴをとりもどしてくるよ。」

神さまたちは言いました。「リンゴをとりもどしてくるなら、かしてやろう。」

ロキはハヤブサの服を着て、飛んでいきました。ロキは、大きな鳥が飛んでいるように見えました。

ロキがきょ人の家に着くと、うまいことにきょ人はるすでした。ロキはイズンを木の実にかえて、その木の実を持って飛び去りました。

きょ人が家に帰ってくると、イズンはいなくなっていました。金のリンゴもなくなっていました。

そこできょ人は、ワシの服を着て、ロキを追いかけました。

ロキは、ワシが追いかけてくる音を聞きました。ロキは、もっと速く飛びました。

かわいそうに、ロキはすっかり息が切れてしまいました。ワシは、どんどん速く飛んできました。

そのとき、神さまたちはロキをさがそうと、町のかべの上にのぼりました。ロキが飛んでくるのと、そのあとをワシが追いかけてくるのが見えました。

そこで神さまたちは、かべの上にたきぎをつみました。とうとうロキは、かべをこえて飛んできました。

そこで神さまたちは、たきぎに火をつけました。火はぼうっともえ上がりました。

ワシは火の中へ飛びこんで、やけてしまいました。

ロキが木の実を下におくと、木の実はすぐにイズンにもどりました。

神さまたちは美しい金のリンゴを食べて、またわかがえりました。

たんご と クイズ　イズンのリンゴ

gods 神さまたち	**pot** なべ	**fire** 火
eagle ワシ	**feathers** 羽	**apples** リンゴ
falcon ハヤブサ	**nut** 木の実	

Q1 大きなワシの正体は何でしたか？

① 神さま　② きょ人　③ ふつうの鳥

Q2 神さまたちが年をとりはじめたのはなぜ？

① 金のリンゴが食べられなくなったから　② 旅でつかれたから　③ ごはんが食べられなかったから

Q3 ロキは、イズンを何にかえてつれて帰りましたか？

① 小さな鳥　② 金のリンゴ　③ 木の実

こたえ

Q1 ②　ワシはじつは、ワシの羽の服を着たきょ人でした。ロキはつかまってから、それに気がつきました。

Q2 ①　イズンと金のリンゴがきょ人につれていかれたので、神さまたちはわかがえることができなくなったのです。

Q3 ③　ロキはハヤブサの服を着て、イズンを木の実にかえ、それを持って飛んで帰りました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #7841（E. Louise Smythe、1904年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1904 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Sarah Jennings、Abby（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。